令和６年度秋田県放課後児童支援員認定資格研修　研修レポート抜粋

（誤字脱字等については校正しているため、原文と異なる場合があります）

県央会場

科目　⑥障がいのある子どもの理解

◆　いわゆる「グレーゾーン」と言われる子どもたちが増えている中なので、そういった診断が出ていない子どもにも、合理的な配慮をしていかなければならないと感じた。また、一口に発達障害といっても、全く特性が違う場合があることに気をつけたい。現在学習塾で指導しているが、学力向上にばかりとらわれると、こういった「見えない障害」を持つ子どもに対して、良くない環境や支援を行ってしまう可能性を感じたので、今後考えていきたい。

◆　秋田県の小学校の生徒数は令和元年から４，０００人減少しているにもかかわらず、特別支援学校の生徒数は、わずか６４名しか減少していないことから、特別支援を必要とする生徒の割合が増えていることに驚きました。また、特別な配慮を必要とする子どもに対して、「～ができない」ではなく、「～があればできる」というその子の良さを伝えることの大切さを学びました。

◆　発達障害は、学習障害、注意欠如多動症、自閉症スペクトラムがあり、どれも目には見えない障害のため、理解されにくいということが分かりました。それぞれの障害特性を把握し、子どもとの信頼関係を築き上げ、苦手な面だけでなく、得意なことから関わりを広げてあげられるように支援していきたいです。問題行動を起こした場合は、話を聞き、正しい表現の仕方を伝え、今後のことを一緒に考え、いいことができたら褒めて対応していきたいです。

◆　障害がある子どもは、人からは分かりづらい症状であったり、周りから理解を得られなかったりと、社会になじみにくい環境を作られてしまうことがあると理解した。障害があると判断できないこともあるし、障害があっても努力が足りないと思われてしまうこともあるので、どちらであっても、一人ひとりの個性として受け入れ、苦手なことへの支援をする必要があると理解しました。

◆　仕事上、発達障害の子、グレーゾーンの子と接する機会もあり、どのように対応したらその子たちにとって、そして周りの子たちにとってもより良いのかなと、常日頃思っております。インターネットや書店、図書館などで調べようとしても、多くが保護者向けで、なかなか欲しい情報にたどり着けずにいます。そうした中、具体例など知ることができ、今後の参考にさせていただきたいと思いました。